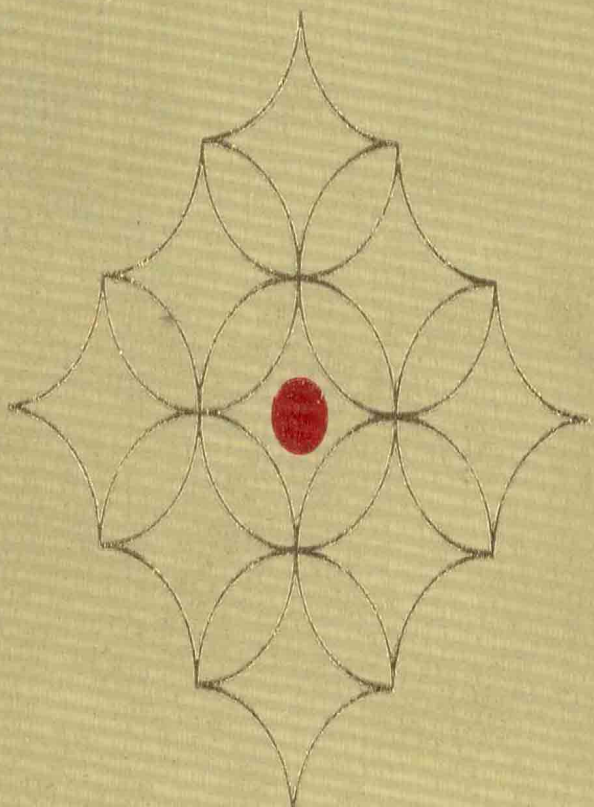

現代日本文學大系

39

集

玄樫一
利千八
下泉津
木古會
彦麓吉明
赤憲文
木村屋
島岡中土

●

筑摩書房

現代日本文學大系　39

昭和四十八年六月十五日　初版第一刷発行

島木赤彦　土屋文明
岡麓　木下利玄　會津八一　集
中村憲吉　古泉千樫

著者　島木赤彦　岡麓　中村憲吉　木下利玄　古泉千樫　土屋文明　會津八一

発行者　井上達三

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷　株式会社　精興社　製本　株式会社　鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0392 (製品) 10039 (出版社) 4604

目次

巻頭写真
筆蹟

島木赤彦集
切火　三
氷魚　一三
柿蔭集　四八
歌道小見　五五

岡麓集
庭苔　八七
涌井　一八

中村憲吉集
しがらみ　一四五
軽雷集　一七一
アララギ二十五年　二〇三

土屋文明集
ふゆくさ　二〇七
山谷集　二三六

木下利玄集
銀　二六一
紅玉　二七三
一路　二九三

古泉千樫集　三一
青牛集
會津八一集　三五七
鹿鳴集
山光集　三八一
〔付録〕
島木赤彦　齋藤茂吉　三九七
岡麓歌集『涌井』　齋藤正二　四〇七
白秋と中村憲吉　木俣修　四一五
土屋文明・歌風の形成　米田利昭　四二三
利玄の習作時代　川田順　四四六
古泉千樫　宇野浩二　四五二
会津八一　龜井勝一郎　四五五
年譜　四五九
著作目録　四七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

島木赤彦集

南ろう美大すむなる赤き魚

しつぽりと提げ日を吹むらん 赤彦

切火

八丈島（大正三年）

船上　其一

青海のもなかにゐつつ昼久し錦絵ならべ見居りけるかも

天の原はるばる来つつ現かも海のいろ深く黒き山二つ

みんなみに遠来しならん海づく日黒潮もはて山二つ見ゆ

日のひかり照りみつる海の深蒼に一人ぽつつり眼をひらく

昼深し禿げしボーイの頭動くデツキの上の空は青しも

全くに諦め得たる歓びの涙ながるる青海の中に

海の光いたも明るみ物をだに思はれなくも我がなれるかも

天と水の光りの中に立ちてゐる我が影ばかり寂しきはなし

夕映空まつ平らなる海のいろに我も染りて物をこそ思へ

かぎろひの夕さりくれば栖に並び鶏のつがひも船の上にあはれ

夕焼の空はあせぬれ深ぶかと波のうねりの片光りすも

船上　其二

ひそかにも止まれる船か霧小雨をぐろく尖る島山の下に

ふかぶかと霧雨の中に船笛のこだま響かふ山近みかも

夜の錨下ろすとならし霧のなかに重き鎖の辷る響きはも

荒磯岩家はもいづこ暁の雨を目透し我が見つるかも

船上　其三

島の山霧はれくれば海にゐる心寂しくならんとするも

船上　其四

艙口ゆ小さき舟に下りにけり朝あけがたの霧の流れに

まど下に小さき舟の来り居り霧のなかには見えにけるかも

霧のなかの小さき舟にとび下りしうつそみの我が一人なりけり

艙口ゆ見ねばならねば降り落つる大粒の霧に顔を出したり

霧雨にぬれたる肩を撫でにつつ小さき舟に一人立ちしも

まことにも島に来つるか眼の前の山みな揺れて近づく我が船

まさやかに暁の高岩かぐろ岩波どよもせり我

が船近づく

荒磯岩黒ぐろと霧はれにけり冬の芒の青みたる見ゆ

島の踊

堂庭に踊る島子をかぞふれば七人だまり月の下びに

踊り子のをどる後は椿の木かぐろみ光り月の下びに

女一人唄うたふなる島踊りをどりひそまり月の下びに

はるばるに波の遠音のひびきくる木のかげ深く月夜の踊り

黒ぐろと夜を濡れ光る椿の木いたも更くるか月夜の踊り

富士に似て海の中なる島の富士眼の前に黒く月夜の踊り

月の下の光さびしみ踊り子のからだくるりとまはりけるかも

大海のまん中にして島なるや流人踊りは悲しきろかも

秋もはや今宵を踊りをさめなる後の月夜の更けにけるかも

胡頽子の葉

荒磯べの芒の中に芒折り魚の鰓を貫きにけるかも

うろくづの鰓にとほす冬芒未だも青くとほしけるかも

磯芒舌にあつれば鹹はゆしここにさびしく折りにけるかも

みんなみの海にすむなる赤き魚しつぽりと提げ日は沈むかも

夕づく日舟引き上ぐる漁師らの足みな傾ぎ遠岩の上に

一ぴきの赤き魚を吾が提げて芒の中の暮れ早みかも

寒ざむと夕波さわぐ海づたひ海は見えずも芒の中に

暮れぬれば芒の中に胡頽子の葉のほのぼの白し星の明りに

ほのかなる草の青みに夕星の夕ゐしづもる我がこころかも

椿の木

椿の蔭をんな音なく来りけり白き布団を乾しにけるかも

はらはらと布団をすべる椿の花土にぞ止まる昼は深けれ

真白なる布団の上に只ひとつ椿の花のこぼれて久しき

昼の音静もりぬれば椿の花障子の外に零るる聞ゆ

椿赤し島の童女が掌の上に卵をのせて売る面わはも

いとどしく椿の花の明るみに面わ近づき来る童女はも

冬の日は短けれども椿の下白き布団のふくらめるかも

夜を寝れ布団の綿のふくらみに体うづまり物

思ひもなし
命あれば海のなかなる島の家ふとん暖かに寝らくものか

島の芒

船を出でし心現なし真青なる芒の中に入りにけるかも
まさやかに朝の雨やみし芒のなか道さへ青み踏みにけるかも
いとどしく青み静もる芒のなか一人ぽつつり行きとどまらず
芒の中いたも明るみ踏みて行く熔岩道の堅くもあるか
いとどしく光のなかの青芒露いつぱいに落ちも零れず
青々し芒のなかに一ぴきの牛を追ひ越しはろかなる道
島芒い行き寂しむ身一人のうしろに大き海光り見ゆ
芒の島あが乗りて来し一つ船煙を吐きて去るにかあるらし
芒のなか歩みとまれば綿津美の波の遠音のさやけく聞ゆ

バナナ畑

夕ぐるる磯の明りゆ歩み入るバナナ畑の葉の茂りはも
畑なかの土の一ところ夕日ありバナナの中に我れ深からし

○

バナナの茎夕日に光り列びたり深ぶかとして葉かげは暗く
いとどしく夕日に光るバナナの葉深み重なり未だは暮れず
バナナの茎垂り葉大きくたまさかに暗きにひかる果の光りはも
葉上にはバナナの房の黄の光りいよよ明るみいよよ暮るるも
夕ぐるるバナナの中に一ぽんのバナナを倒す音もこそすれ
バナナ畑土やはらかに島少女足あと深く踏み行けるかも
バナナの茎やはらかければ音もなし鉈を打ちうち女なりけり
島の子の長き垂り髪うち仰ぎ見らく幽けき果の光りはも
いちじるきバナナの茎の切り口ゆ水は滴る土の暗みに
島の子は寂しけれども夕日さし黄の果をふさに担ぎけるかも

ある時は

バナナの皮剝きて投げたりさし出の磯岩黒きゆゑ波は青きか
日の光り明らさまなる岩の上ゆ見入らざらめや波の青みを
高きより見下ろせば波の底も見ゆ大き岩沈み光り揺り見ゆ
夕日の岩真黒けれども薊の花咲くところにはかたまり咲くも

薊咲く岩の上高み島の子の冷たき手をば引き上げしかも

森林

常磐木の林のなかに家あらしある時は児の泣き声きこゆ

椎森の真昼の空の明るみに烟一すぢ立ちのぼり見ゆ

山の国（大正二年）

諏訪湖

夕焼空焦げきはまれる下にして氷らんとする湖の静けさ

冬空の天の夕焼にひたりたる褐色の湖は動かざりけり

たかだかと繭の荷車を押す人の足の光りも氷らんとする

押して行く繭の荷車に山の湖の夕照さむく片明りせり

かわきたる草枯いろの山あひに湖は氷りて固まりにたり

この夕氷のいろに滲みたる空気明りのいちじろく見ゆ

おぼろおぼろ湖にくろめる山のいろも崩れんとする夜の寒さはや

八ヶ岳

野は今は白雲の群れの片寄りに吹き寄せられし夕光りかな

まばらなる冬木林にかんかんと響かんとする青空のいろ

野の中に暮るる一つ家いやましに凩のなかに静もれるかも

凩の吹きしづまれば瀬の鳴りのいづこともなし広き野なかに

冬山ゆ流れ出でたるひとすぢの川光り来も夕日の野べに

かさかさと落葉林を通り抜けし夕明るさをたどき知られず

あきらめねばならずと思ひ入りにつつ唾を冷たく嚥みこめるかも

御牧が原

草深野丹にこもる茎のほのかだにさやらんとする身はあはれなり

草むらの濃き紅に我が影の消えてまた来ないつの日かあらん

人に告ぐる悲しみならず秋草に息を白じろと吐きにけるかも

孤りなる死にをもすらんと嘆きつつ錆び紅の草に胡座をなせり

草の藪はいや昼深く明るめれこの悲しみを守る心かな

まがなしきこの心をも堪ふるか葉の紅の明るみの中に

かへらんと今は嘆けれ青空に煙草ふかして見やりけるかも

犬蓼のくれなゐの茎はよわければ不便に思ひ踏みにけるかも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いたましく天の火を吐く夜の山眼上にあふぐ
駅は暗し

遠どほに冬枯の道のぼり来て火の山の下の駅
なりけり

山の宿に酒のみしかば夜は深し心あやしくも
笑はんとすも

高木村

褐色の草枯の上にいささかの草屋根いよよか
わき光れり

冬枯の山田の畦の幾段に夕日のかげる静歩み
かも

冬木の坂あからさまにし傾けば氷の湖ゆ照り
返る明さ

敷藁に滲み出でし泥は夕づく日未だ明けど氷
りけるかも

氷の湖ゆひた吹きあてるつのり風日を明かあ
かと揺る障子かな

藁の上に並べて下駄の乾してあり小さき赤緒
も氷りたるかも

雪の夜

雪のふるひとつ草家に赤き灯がほうと点きぬ
る夕なりけり

木のなかの赤き灯つつむおぼろ雪いよよ静に
降りつもるかも

乾ける空気

いとどしく暮れかわきたる空気のなか芒は白
く摧けんとすも

夕まぐれわが顔のへに芒の穂いたも白める空
気のひびき

夕寒き芒がなかに入りてゆくおのが姿の黝く
もあるか

夕明りあまり明けば冬木のなか泣く子をあや
す思ひするかも

はるばると空に向ひてすぼめたる眉に光引く
ひとつ星はも

陸奥の女

山駅の夜のひびきをしづめつつ笛鳴りにつつ
遠去りにけり

停車場に銭をかぞふる老人の手の灯明りに笛
きこゆなり

みちのくへ逃げてゆくとふ少女子と話なくな
り笛きけるかも

流らふ色

青草原洋傘のなか深ぶかと沈みにほへる面わ
なりけり

日の明るき女の頬に青草のにほへる色はかな
しかりしか

この青む草の広原のかなしみをしじめ集むる
丹の頬なりけり

うれひある目見をりをりにあげぬれば雲は眼
ぢかに青草の原

ゆゆしくも揺れ流らふ霧の流れ傘をかたむけ
雨にならんとす

霧のなかに明るみ徹る肌のいろの心静けさに
堪へられぬかも

病院

子の眼病に重大なる疑問を宣せられて直に東京に伴ひぬ。夜一夜汽車に揺られて七月二十四日暁飯田町に着けば直に車並べて病院に伴ふ。疲れを休むるひまもなし。親心只恐れ急ぐに。

静もれる車上の姿、みづからの病を知れる吾子が静もり

あが人力車動きてあるを覚ゆれど眼の前の子をこそ守れ

ふと我にかへるわが身は暑ければ流るる汗を拭かんとすなり

薬さす眼をおさへつつ眠るまでに疲れて遠く来らしめしか

看護婦のみちびきのぼる梯子段浄く寂しく拭かれてありけり

親心おろおろするも坐りゐて額の汗を拭きてやれども

空瓶に煙草のほくそ払ひたる心あやしく笑へざりけり

どよもせる都会の中にたまさかに廊下を通る足音きこゆ

広らなる街の夕焼屋根ちかくいや焼けさかり寂しくもあるか

親と子と寂しきときは蚊帳ぬちに枕並べて寝て語り居り

この父の顔見ゆるかとむごきこと問ふと思ひて問ひにけるかも

父はけふ国にかへると聞きわけし幼き顔を見てやりにけり

赤罌粟の花

俎の魚いきいきと眼をあけり暮れ蒼みたる梅雨の厨に

うつくしき血しほを指に染めにつつ生きものの命さきて我れ居り

小さなる魚の命の断たるればうつくしき血は流れながれぬ

赤き血しほ地に垂れてあはれ炎々と燃えあがる青き茎の上の花

蒼やかに暮れただよへる土なれば花はこぼれて沈むが如し

夕ほろほろ赤罌粟の花はこぼるれば死なせし魚に念仏まうす

わが眼の力あはれに疲るれば涙こぼるる器械の如くに

さ蠅らと寄りあひて住める六畳の空気にたまる夕日の赤さ

わが家にこのごろ火をも焚かざれば一人物を書き夕ぐれにけり

夕まぐれ音をひそめて帰り来し子どもは雨に濡れてをるかも

夜おそく水を貰ひに行く道は桑の葉青く灯を提ぐるなり

薪くべて火をふくおのが唇に涙流るる拭けども拭けども

静やかに雲行きぬれば円らなる青桑の丘の動く思ひすも

村会

夜を深くいよよ黙せる村会の庭は落葉の吹かるる音す

何本目の蠟燭ならん霜の夜の蠟をとろとろ流しけるかも

学校を建てねばならぬしんぱいの顔こそ並べ蠟燭の明り

冬山の萱ことごとく売るといふ百姓の心あはれなりけり

幾夜さの集ひのはてにおぼろなる百姓の眼のねむらんとする

寒国の女学校

ポプラーの冬木の窓はしんとして光り静めり女子らこもりて

きよらかに拭はれにける板上に女の稚足の光り動きし

丘の下市街の屋根は雪降れば昼ひそやかに歌ひ終りぬ

丘の雪はだらに今は晴れたればはゆげにしつつ見る眼かな

闇深く

闇深く入りきはまれり今生に口外をせぬこの心かな

眼のかぎり冷えつくしたる娑婆の道に人ぼろぼろと別れゆくかなし

ほろほろと遠き雲りのうす明りうすろひにつつをはりなりけり

ほのかなる曇りをゆくはおぼつかな我が足おもく崩ゆる思ひを

国を出づる歌　（大正三年）

家を出づ

妻も我も生きの心の疲れはてて朝けの床に眼ざめけるかも

かうしつつ膝ならべつつゐる心暁のひかり時すぎんとす

古家の土間のにほひにわが妻の顔を振りかへり出でにけるかも

日の下に妻が立つとき咽喉長く家のくだかけは鳴きゐたりけり

幼な子は病みのよわりを立ち出でて吾を見たるかな朝日のなかに

三人の子だまりてあとにつき来る湖の朝あけは明るぐるしも

幼な手に赤き銭ひとつやりたるはすべなかりける我が心かも

この朝け道のくぼみに光りたる春べの霜を踏みて別れし

灰の上に涙落してゐし面わとほどほに来て思ほゆらくに

軽井沢に宿る。四月十一日といふに草木皆冬枯のさまなり。

雪のこる土のくぼみの一ところここを通りてなほ遠ゆくか

今は世ははろかなるかなと雪どけの水たまりへにかへり見にけり

雪とけて遠あらはなる地の平らさむく小さく
日は没らんとす

国境とほのぼり来し野の上にほかり白きは辛
夷の花か

日くるれば冬木の条のほろほろに壊れんとす
るわが心はや

家かげは霜凝る土のかたまりに嵐吹きつのり
明るかりつも

凩の宿に屏風を立てまはし灯を明くしてい
かにかはせん

路地

思ひかね路地を入り来れ雪どけの泥はおどろ
に明るかりつも

十年

宵ふくる土のけはひに桜ふり其所に車を行か
せけるかも

ひそかなる幌のすきまは店の灯にちらちらと
花のちりしく光

かうなれる心は今は堪へられね車はすべる夜
ぶかき土を

更けぬれば窓の外のべの桜の灯ほのかにさし
てうき面わはや

ぬば玉の夜は一時を過ぎたらん桜の庭に拍子
木ひびく

十年の行くへ思へば南無大悲現し命を死なし
むなゆめ

お互によわきからだは十年のながき命を信ぜ
んとすも

昼ふかき桜ぐもりにするすると青き羽織をぬ
ぎし子らはも

落葉松の萌黄の芽ぶきけぶりつつ日はたけな
はとなりにけるかも

口苦き煙草を折りてすてにける木の下の土に
又も来めやも

やうやうに起きあがり得し汝がからだ撓ぬの
つかれを帰らしむるか

街衢（大正三年）

山桜

寂しさよ山ざくら散る昼にして五目ならべを
すると告げ来し

松の木に桜流らひ小半日五目ならべをすると
告げ来し

書物さげて戻り来ればさくら散る山中のはが
き届きてゐたり

峡底の春は寂しく残るとふ桜のかげに女なり
けり

白雲の山のおくがにはしけやし春の蚕飼ふと
少女なりけり

嘖嚏

梅雨真昼鼻のそこひのむず痒し嚏をせんと口
洞あくも

くさめするわが顔の前は雨の雫硝子の窓に流

れつつをり

せんすべを知らなき時は口あきてつぎの嚔を待つまん真昼

まんまひる梅雨に倦みたる心もて大きくさめをしたりけるかも

五月雨にぬれ来し女ひそまりて見入らざらめや昼の鏡に

硝子戸に雨流るれば庭の青のおぼろに透きて真昼なりけり

雨だれの音いや深しあが口を鏡のなかに噤めてさびしも

梅雨ふかき下宿となりぬわが顔を鏡の中に見つつわが居り

先生の死画像の軸をはづさんと思ふ五月雨の久しかりけり

稲毛の海

梅雨明り松の木の間の深うして雀のつむる愛しかりけり

五月雨は晴れんとすらし百姓の頭の上に雲は赤かり

夕焼の空の下びにつかれたるわが口中は苦みを覚ゆ

五月雨の雲高くあがる海に向きて丘は暮れなびき遠赭のいろ

かきくらし五月雨るる丘のひた落ちにげそりと落ちて黒き海かも

おもおもしく濡めりみちたる靄のこもり波ほのぐらく或ひは光り

靄のなか光り浮き来る屋根の上に梅雨の海の時明り見ゆ

雨あがり揺るる靄の一ところ白き帆しるく光りて動く

帰省　其一

ゆゆしくも神鳴らんとする空気のいろ燕ちちと舞ひひそみたり

日はたけなは黄にからびたる豆の葉にぴかりと揺るる遠稲光

青葉の窓あやに明るみ削り氷ゆ白き蒸気たつ昼深みかも

帰省　其二

起き出でて蚊帳ぬちの蚊を焼きにけり蠟燭の火を持つ夜は深し

蚊をやくと夜をふかく持つ灯の下は腹もあらはに我が子のねむり

子どもらの寝顔並べり黄色の火をうごかして蚊の翅追ふも

燈の下にそろばん持てる妻の顔こらへられねば寝なとこそいへ

寝られねば水甕にゆきて飲みにけりあな冷たよと夜半にいひつる

水甕の蓋誰れか忘れて灯の下にすなはち光る夜の水はや

蚊のうなり水甕ふかく籠りたり柄杓を水に沈むるこころ

親子とも生れこしものか夜の灯ふけこやり寝かへり汝が顔見るも

帰省　其三

桑の葉の茂りをわけて来りけり古井の底に水は光れり

昔見て今もこもらふ歯朶の葉の暗がりふかく釣瓶を吊るも

雲とほくまたも行きなん桑の葉のしげりにこもりこの水を飲む

朝あけの桑の葉青みかがやけり盥のなかに水を動かす

あが側に子は立てりけり顔洗ふ間をだに父を珍らしがるか

帰省　其四

日焼け瓜いくつも下がり明るめり夕焼畠に我も明るき

いとどしく夕焼畑のまんなかに熟き胡瓜を握りたるかも

桑畑の桑価は立たず三右衛門泣くかはり唄をうたひけるかも

帰省　其五

芒の穂白き水噴くと見るまでに夕日に光り並びたるかも

紅の芒の穂並くもり日の静かさふかく動く時かも

朝づく日谿とほ埋む青葉の群れひえびえと動き白みを覚ゆ

野に焚く火

火の上に投げかさねたる草くづれ烟黄ろく渦まき光る

草深く燃えあがりたる火の炎黒ぐろとして噴きにけるかも

黒ぐろと噴ける炎に夏深けの草は大きく揺れたりけり

何草の焼くるにやあらんあからひく日は明うして匂ひ滲み来も

夏の草い分けおしわけ立ちのぼる炎の上に太陽が照る

太陽ぞ炎の上に堪へにける炎の上に揺るる太陽

何といふ今のこころぞ炎のそこの紅ゆすり目は側らされず

炎はも物をやかねばあられねば白き花びらを眼の前にやく

夏草の茂りを深くくぐりたる黄ろき烟立ちまよひ居り

歌沢

歌沢の唄は落ちゆく夜の静み枕はづして寝る女が思ほゆ

夜の燭いたも更くれば歌沢の絃は芒にならんとするも

夕焼

稲のなかにふかぶかと立つ百姓の顔に照りかへり夕やけの空

夕焼くる雲もあらねば高天の奥所明るく黄に澄めるかも

夕焼の青草ふかく真鍮の烟管を石にはたきけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com